〔学術論文〕

青年期の延長にみる親子関係の変化
The Changing in the Relationship between Parents and Adolescent

大久保　摩里子
Mariko Okubo

要旨　青年期の親子関係において親からの自立は青年の最も重要な発達課題の1つである。しかし近年、このような自立に関する親子の分離的側面の問題が青年の抱える問題として注目されるようになってきた。そこで青年期の親子関係のあり方の変化を捉えるため、親子関係の発達的変化と青年の自立との関連に着目する。しかしこれまでの多くの自立研究では自立の概念は一様でなく、その定義も明確にされてこなかった。青年期の親子関係の発達的変化を明らかにするためには、理論的枠組みの設定および枠組みの実証的検討を適切に行う上でも自立の定義化が重要である。そこでこれまでの自立研究をレビューするとともに自立研究における課題を再確認した。まず、これからの自立に関する研究は、これまでの理論を質的なデータから見直すという実証的な検討が必要である。質的な研究を積極的に行い、independence（自立）やautonomy（自律）とは区別した日本人の特性に合った自立の概念を確立することが重要である。また自立の発達段階を明らかにするような尺度作成が必要である。そして仲間関係が自立を促進することを踏まえて、青年期の対人関係の観点から親子関係の関係性と自立の程度の関連を捉えることも重要である。そうすることで青年期の親子関係の発達的変化における親子の肯定的な結びつきをうまく概念化し、葛藤が非顕在化した親子関係の実態を明らかにするために有効な理論的枠組みの設定を可能にすると予想された。

キーワード：青年期、親子関係、自立

はじめに

青年期における親子関係の特徴は親からの自立や、親離れだといわれてきた。親からの自立が青年期の終わりであり、自立は青年期の最も重要な発達課題の１つである。しかしこれは親に全く頼らないということではなく、親をひとりの大人として見ることができ、かつ自分の生活と人生に責任を持とうとすることである。青年にとって親からの自立は、心理的自立だけでなく物理的自立も簡単なことではない。そこで青年の親からの自立の過程には自立の欲求と依存の間に葛

藤が生じるのである。このように自立は青年の心理発達を説明する上で重要な概念の1つであり、青年の自立において青年が心理的に親離れすることの重要性が強調されてきたが、それと同時に親が子離れすることも重要である。青年の親からの自立という問題は、青年には独自の価値観の確立が求められる一方で、母親には段階的に子どもとの距離をとり、干渉領域を減らしていくことが求められる相互作用的な課題として捉えることができる。

これまで青年期の親子関係についてはBlos（1967）の「第二の個体化」モデルや、西平（1990）や落合・佐藤（1996）の心理的離乳過程に関する発達プロセスなど、多くの研究がされてきた。そしてこれらの研究では青年と親が共に協調的な態度変容を示し、青年期前期には分離が強調され青年期後期では親密な結びつきを取り戻すことが指摘されてきた。このように、青年期にある子どもと親との関係においては、分離と結合のバランスが大切なのである。つまり青年期の親子関係の発達的変化について検討する場合に重要な観点の１つは、青年の自立からの観点であることがいえる。しかし近年、青年が自立できず依存期が長期化していることが「ひきこもり」、「パラサイト・シングル」、「フリーター」、「ニート」といった社会問題として注目されてきた。このような問題の背景として青年の不安定就労の増加のような社会的要因がまず考えられているが、青年の親への自立欲求の表れである第二次反抗期の非顕在化とも考えられる「仲の良い親子関係」にも注目すべきである。どんな親子関係でありたいかという問いに「友だちのような親子」と答える親が増えており、威圧的な親になりたくない、子どもとは出来る限り対等な関係でいたいと考える親が増えているようだ。特に女性は母親と友達感覚で接する傾向が強い（辻、2003）ようで、現代の青年期の親子関係は従来の葛藤や反抗といった険悪な親子関係ではなく、仲の良い親子関係が特徴といえる。このような親子間の葛藤に直面しない現代の青年期の親子関係における心地よさは、親元からの自立への欲求を殺いでしまうのではないかと危惧されることが多い。しかし一方で、反抗を顕在化しない青年は真に自立できない葛藤を抱え込んだままであることも決して稀ではない。そこでこのような問題は青少年のマイナス方向への変質論として危惧されることが多い。しかし渡部（2005）は、このような事態を単に好ましくないことだとしてマイナス的に捉えることに疑問を投げかけている。また山田（1997）は、多様化する社会の中では今までのように親が尊敬の対象にならなくなってきており、このような親子関係の変化は適応的な変化の結果ではないだろうかとして、親と子が実質的にコミュニケーションをとるために「友だち」という手段をとるのかもしれないと指摘している。

では、従来の青年期の親子関係に対し、「友だちのような関係」が親子関係における適応的な変化であるとするならば、このような青年は親からの自立への欲求を持ちながら葛藤が非顕在化した緩やかな関係を築いているのだろうか。このような青年期の親子関係のあり方の変化をとらえるために、親子関係の発達的変化と青年の自立との関連に着目する。そこでまず、自立の概念を確認するためにこれまでの自立研究のレビューを行うとともに自立研究における課題を再確認する。

Ⅰ．自立を捉える概念的な枠組みと自立研究

青年は親への依存からの脱却を求められ、一人の人間として社会へと巣立っていくことが期待される。そのため青年期は自立において不可欠な時期としてとらえられていることから、青年期の親子関係について検討する際に、青年の自立が重要な観点の1つであるといえる。しかし、自立についての先行研究のほとんどでは自立そのものの定義がなされていない。これまでの発達心理学における自立概念は経済的自立(安定した収入)、社会的自立(年齢、結婚など)、生活的自立(家事ができるかなど)も含めて定義されることが多く、その定義は研究者によってさまざまになされてきた。福島(1997)はこのような現象について、自立は使用する人や使用のされ方・その対象によって意味内容が微妙にことなっていると指摘しており、自立の概念については自立と自律、独立といった言葉と共に混同されて使用されてきたために、曖昧さを含んだ概念として現在に至っていると指摘している。

「自立」と「自律」の概念の混同については神谷(1997)がindependence(自立)とautonomy(自律)の関係について述べている。これによると、欧米の研究ではindependence1とautonomyを同義に考える場合と、independence1とautonomyを下位要素として考える場合があり、さらにautonomyに関してはindependenceと対立概念である場合など欧米においても多様な使われ方をしていると指摘している。そしてこのことが日本語への翻訳の際に混乱を生じているとして欧米におけるautonomyの概念と日本における「自立」の概念には曖昧な関係が存在していると述べている。つまり、autonomyは日本における「自立」とかなり似通った意味合いで使用されているようであるが、autonomyの日本語訳は「自律」とされている。そのため日本において「自立」という場合は、一般的にindependenceが用いられている。神谷の指摘によると、日本での言語感覚からすれば、人間の成長において、まず自己の身体的な行動の統制、制御が可能になること、さらに心理的、社会的に他者との関係においてもトラブルなく自己の行動を統制できるようになることが「自律」から「自立」への発達的移行を促進するため、autonomyと「自立」の概念は一致するようで一致しないものである。さらに欧米でのindependenceの概念が日本における自立を十分に説明し尽くしているとは言い難いとも指摘している。そこで、自立の定義化は理論的枠組みの設定や枠組みの実証的検討を行うためにも重要である。そのため、ここではまず、これまで自立を捉えてきた概念的な枠組みについてレビューする。

1．心理的離乳の研究

青年期は心理的離乳の時期であり、また親子関係が大きく変化する時期であるとされている(山岸、2000)。「心理的離乳」はHollingworth(1928)が提唱した概念で、青年期に生じる「家族の監督から離れ、一人の独立した人間になろうとする衝動」のことである。これを受け、西平(1990)は心理的離乳を「児童が青年となり、青年が成人となり、さらに自己実現を果たすために必要な

心理的な発達過程」ととらえている。また、久世・久世（1980）は、発達的観点から自立を身体的、行動的、精神的、経済的の4側面から定義しており、この4側面は身体的、行動的自立については幼児期における基本的生活習慣の獲得が主要な問題となっており、精神的、経済的自立については青年期の問題としている。つまり青年期には親からの精神的な分離を図りつつ、経済的にも自立するための準備をすることが求められるということである。このことから、心理的離乳の概念は青年期の自立を精神的自立の側面からとらえる有用な概念といえる。

落合・佐藤（1996）の心理的離乳の概念に関する実証的研究では、この過程において中高生にあたる青年期前期・中期には、理想と異なる親を批判し葛藤が生じ、親から分離しようとする欲求が高まるが、大学生にあたる青年期後期になると親を客観視できるようになり、親子関係を再構成し対等に関わることができるようになるという独自の発達モデルを提唱しており、この関係の捉え直しによって子は親を一人の人間として捉えることが可能になるとした。また、小高（1998）は親子関係の変化は日常生活における子の親への態度や行動にも表れるとして、大学生を対象に日ごろの親に対する態度に関する項目を収集し質問紙を作成した。その結果（1）親からのポジティブな影響、（2）親との対立、（3）親への服従、（4）親への情愛的絆、（5）一人の人間としての親の認知、の5因子が抽出され、青年の心理的離乳の過程を捉える有用な測定道具を提案している。これらの研究は、White、Speisman、& Costos（1983）による青年期から成人期初期までの両親との関係の発達プロセスの6段階の一部と一致している。Whiteらの6段階プロセスでは、初期の段階では青年が両親から分離した自己を強調し、両親を批判する態度が顕著であるが、やがて子どもは両親との関係において自分が何らかの形で寄与しているという視点や、続いて両親の立場に身を置き、両親の目で物事を見るようになる視点が獲得される。そして、両親が自分をひとりの個人としてどのように眺めているかということについて明確なイメージを持つようになる。一方、両親も子どもが親に対してアドバイスやケアができ、自分自身の意見を持っている存在であることを理解するようになる。そして、最終段階では互いに個別の人間としてみなし始め、仲間のような相互性を示す段階に至るとされている。

2. アイデンティティの研究

Erikson（1950）の漸成理論において青年期は、アイデンティティ対アイデンティティ混乱の時期にあたり、この「アイデンティティ危機」の解決が青年期の課題であるとされている。「アイデンティティ危機」の解決とは、自己を正しく理解し、社会的に認められる形で主体的な自分を再構成することである。Eriksonは、青年が成人としての役割を身につける準備を整えるためには、成人になる以前のすべての経験から獲得していなければならない諸成果を一定の総合された形へと総括する必要があるとして、これを「自我同一性」の確立とした。青年は自分の過去と未来への展望との間に、ある永続的な連続性があると無意識的に感じられるような「自我統合」を行う

ことなしでは成人の社会に入り込んで個を生かすことはできない。また自分の所属する集団の価値観や理想と、自分の確信をなす何かとが一致していることを確認でき、集団との間に連帯をもつことも成人として生きるために不可欠である。

アイデンティティの発達と親子関係に関する研究として、金子（1989）は両親、特に母親との心理的距離が遠いほどアイデンティティ拡散感を強く持つことを見出した。また、高橋（2001）はアイデンティティ発達と親に対する親和性との関連について検討し、青年期前期にある青年ではアイデンティティ発達の程度が高いとき親に対する親和性も高く、同性の親に親和性欲求を持つことを明らかにした。日本におけるアイデンティティ研究は質問紙を用いたものが多いのに対し、Bosma & Gerrits（1985）は、観察法により家族機能と青年のアイデンティティ達成との関連を検討した。その結果、青年のautonomy（自律）、家族の対話がアイデンティティ・ステイタス、特にアイデンティティ探求と関連していることを見出した。このような研究方法では、青年の心理社会的発達における家族の相互作用の役割にも注目しており、青年期の変化する親子関係を概念化して測定する方法が特徴的である。青年期の親子関係とアイデンティティに関する研究はさまざまな方法に基づいて行われてきたが、どの先行研究からも青年期の親子関係がアイデンティティ確立に影響を及ぼすことが見出され、さらに青年の自己を形成する概念と関連し重要な役割を担っていることが明らかにされてきた。

山本・岡本（2008）は親子関係の多様化を考える上での一つの手がかりを見出すために大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ、対人態度の関連性を分析し、その性差について検討した。その結果、女子青年において特に母親との結びつきが強いことが示され、さらに母親との心理的距離が近く親和志向が高い密着した母子関係がアイデンティティ確立の妨げになっている可能性を指摘した。また、この研究では親子関係と他者関係に焦点を当て、親子関係とアイデンティティ、対人態度の3点を同時に検討しており、アイデンティティは親子関係よりもむしろ対人関係によって影響を受けることが明らかにされた。Eriksonは、最終的な自我同一性の確立は青年期後期の課題で、前半は身体的変化と性的成熟を受容すること、同性との仲間意識を確立し異性との人間関係を獲得することが課題であるとした。このとき仲間との連帯感を喪失し疎外されることが大きな危機となる。また、この時期は重大な決断を行わなければならない時期でもあり、親や他の大人の模倣でない自己というものは何かという疑問につき当たる時期でもある。このようにアイデンティティ確立の時期にある青年にとって他者との関係は非常に重要である。そこで、山本らのような親子関係と他者関係に焦点を当てた研究は親子関係の多様化について考える新しい観点であると言える。

3. その他の自立研究

青年の心理的自立についての研究では、Hoffman（1984）が青年期の心理的自立を多面的に理

解する必要があることを指摘し、機能的自立、態度的自立、感情的自立、そして葛藤的自立の４つの異なった心理的自立の側面を提唱している。渡邊（1990）はこれまで自立概念は複数の側面からとらえられてきたが、中でも情緒的側面、行動的側面、価値的側面の３側面は自立の概念化の枠組みとして不可欠であるとした。また、高坂・戸田（2003）は、自立という用語が日常生活で頻繁に用いられているためにその意味する内容がその場の文脈に応じて微妙に使い分けられてきたために概念として曖昧になってしまっているとして、理論的枠組みの設定および枠組みの実証的検討を適切に行う上でも自立の定義化が重要であると指摘した。高坂らは青年の心理的発達に着目して経済的自立や社会的自立とは区別した「心理的自立」という語を用いて「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を有した状態」と定義している。さらに、心理的自立概念を把握するために行動・価値・情緒・認知の4つの概念的枠組みを設定した。これらの４側面は自らの意思で決定した行動を自分の力で行い、その結果の責任を取ることができるようになること（行動的自立）、行動・思考の指針となる価値基準を明確に持ち、それに従って物事の善悪、行動の方針などの判断を下すことができるようになること（価値的自立）、他者との心の交流を持つとともに、感情のコントロールができ、常に心の安定を保つことができるようになること（情緒的自立）、現在の自分をありのままに認めるとともに、他者の行動、思考、立場および外的事象を客観的に理解・把握することができるようになること（認知的自立）である。さらにこの定義を基に心理的自立尺度（Psychological Jiristu Scale : PJS）（高坂・戸田、2006）を作成している。この尺度では「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現在把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」の5下位尺度から構成されている。高坂らはその後の研究においても改定を続け、これらの5下位尺度に「責任」を加えた心理的自立尺度第2版（Psychological Jiristu Scale : PJS-2）も作成した（高坂・戸田、2005）。また、福島（1992）は主に女性は、親や友人といった他者との関係性の確立については男性よりも優れていることを示し、女性において自立と依存が共存していることを指摘した。このことは、他者との依存関係を体験することで自立が促進されていくことを示唆している。さらに日本における自立は他者人間関係を基礎として発達するものとしてとらえ、他者との人間関係、関係性を強調することによって日本における自立概念を実証的にとらえることができるだろうと指摘している。また永江（2000）は自己中心的な心性を有する現代の若者―ゆらぎ人間に対して、他者との共感性を獲得していくことが自立していく上で重要であると述べている。以上のことからも人間関係を抜きにして自立について考えることは不可能のようである。

Ⅱ．自立と仲間関係

青年期には社会的役割や人間関係がそれまでの家族を中心とした狭い人間関係から、より広い範囲に広がっていく。また青年期の特徴の1つである第二次反抗では、両親や教師などの周囲の

大人に対して反抗を示し、心の支えや共通の悩みを共感しあう精神的なつながりとして友だちや仲間を選ぶようになる。こうした背景から、青年期の親子関係と仲間関係に関する研究が行われてきた。青年期には生活の大部分が友人との交流を中心に進められるようになり、家族関係の比重は相対的に少なくなる。さらに少数の特定の友人と非常に親密で個人的な人間関係を作ることも多くなり、これがいわゆる親友である。このように、青年期にはいろいろな人間関係によって多面的な行動をとるようになっていく。その中で、青年は社会的現実にも適する自分というものをまとめあげなければならない。そのため青年はこれまで主に両親の価値観に基づいたしつけを通して培ってきた児童期までの古い習慣を捨て去り、自らの意志で選択した新しい習慣を獲得しようとする。社会の中へ人間関係を広げていくということは親からの自立を必要とする。Blos (1967) は、青年が親の影響から自立する過程を「第2の分離 - 個体化期」とした。また宮下・渡辺 (1992) は友人関係の親密度とアイデンティティの関連を検討し、女性において親密な友人関係が自我同一性との関連で重要であることを示した。これらの結果は、青年期には友人が自己意識の形成に大きな影響を与える「重要な他者」であることを裏付けている。このことから、親密な友人関係の形成は青年にとって重要な発達課題であり、自立を促進する要素であるといえる。青年の親からの自立の欲求を表しているのが「第二次反抗期」である。反抗は青年が親の権威に従う他律的態度から自律的態度へと向かおうとする自我の成長の証しであると見なされてきた。このような観点から青年期の親子関係を捉えると、青年の親からの自立、親や社会からの自由という側面が強調される。ここで自立とは、主観的な自律性 (autonomy) についての自己報告、個人的決定の自信、親に是認されるものと仲間に是認されるものとの二者択一の選択などと考えられ (Hill、1986)、親からの分離、社会的影響からの自由という暗黙の概念を含むものである。しかし、このような概念は青年の心理的過程は表しているが、親の心理的過程は表しておらず、親子の相互関係については検討していない。

青年期の対人関係の特徴は親子関係よりも友人関係や異性関係に重点が置かれていくことであるが、実際には親子の関係が希薄になってしまうわけではない。小高 (1998) は、このような青年期の対人関係においても親子の関係はその基底において継続するとした。これは青年期には仲間と過ごす時間が多くなり親と過ごす時間が少なくなるが、青年は一般に両親への肯定的認知と情緒的方向づけを維持しているという結論と一致している。また、Youniss & Smollar (1990) は、親と仲間の関係を統合する概念に関心を持ち、青年は仲間との相互作用から自己に類似するものと差異のあるものがいることを認知するとした。そして仲間との関係から得た相互性は、技能であり、青年期前期においては親との交渉にそれを利用すると考えた。また母親は、青年の仲間との経験を父親に橋渡しする特殊な役割を担っていると指摘した。このような青年、両親、仲間の関係を合わせて検討することは、それぞれの関わり方の違いを理解するのにも役に立つ。

Ⅲ．まとめと今後の課題

従来、青年期の親子関係は親子間に葛藤の様相を呈するものとされてきた。しかし、このような見解は支持されるというよりむしろ否定されてきている。青年期の親子関係において青年の親に対する葛藤が自立の欲求であるとされてきた（Blos、1971）が、これに対しMontemayor（1983）は、葛藤的な親子関係は青年期の典型ではないとした。しかしこのような親子の肯定的な結びつきはうまく概念化されていない。これまでの青年期の親子関係の研究の多くは、親子関係の分離と結合における青年の心理的発達過程を明らかにしてきた。しかしこのような概念は青年の心理的発達過程は表しているが、親の心理的過程は表しておらず、親子の相互関係については検討していない。そこで今後は、親子関係が親から子への一方的な権威の型から相互性へと再交渉されることによって変容することに着目し、このような変容の関係と過程を重視することが必要である。

ところが日本における青年期の親子関係研究の多くは質問紙法によって行われており、親子の相互作用を明らかにするには限界が感じられる。親子の相互作用による親子関係の変容や、家族、仲間、青年のそれぞれの関係を明らかにするための研究方法が必要である。そこでこれからの自立概念についての研究は、理論的な枠組を活かし、その理論を面接法や自由記述法などの質的なデータから見直すという実証的な検討が必要となるだろう。

また、高坂ら（2006）の心理的自立尺度は青年の自立の状態を測定するのに有用な尺度であるが、その発達的な過程をとらえることはできない。そこで、自立の発達段階を明らかにするような、例えばアイデンティティ発達の視点を加えた尺度作成が必要である。また仲間関係が自立を促進することから、青年期の対人関係の観点から親子関係の関係性と自立の程度の関連をとらえていくことも重要である。これにより親子の肯定的な結びつきの概念化を可能にするかもしれない。ここまでレビューしてきたように「自立」という概念についての理論的な研究はこれまでに多く行われてきたが、自立の概念は一様ではない。自立について質的な研究を積極的に行うことで、independence（自立）やautonomy（自律）とは区別した日本人の特性に合った自立の概念を確立することが今後の課題である。

参考文献

Blos, P.（1962）. *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press.

（ブロス，P.　野沢栄司（訳）（1971）．青年期の精神医学　誠信書房）

Blos,P.（1967）The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 22, 162 - 186.

Bosma, H. A., & Gerrits, R. S.（1985）. Family functioning and identity status in adolescence. *Journal of*

Early Adlescence , 5, 69-80.

Erikson,E. H. (1950) . *Childhood and society*. Norton

福島朋子 (1992) . 思春期から成人にわたる心理的自立—自立尺度の作成及び発達的検討— 発達研究, 8、67-87.

福島朋子 (1997) . 成人における自立観:概念構造と性差・年齢差 仙台白百合女子大学紀要, 創刊号、15-26.

Hill, J.P (1986) . Attachment and autonomy during adolescence. In G. Whitehurst (Ed.) . *Annals of Child Development*. vol.3 JAI Press, pp. 145-189.

Hoffman, J.F. (1984) . Psychological separation of late adolescents from their parents . *Journal of Counseling Psychology*, 31, 170-178.

Hollingworth,L.S. (1928) . *The psychology of the adolescent*. D.Appleton-Century Company.

神谷ゆかり (1997) . 自立の概念規定について—"autonomy"の視点を中心に 安田女子大学紀要, 25, 105-113.

金子俊子 (1989) . 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.

高坂康雅・戸田弘二 (2003) . 青年期における心理的自立 (Ⅰ) −「心理的自立」概念の検討− 北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要, 4, 135-144.

高坂康雅・戸田弘二 (2005) . 青年期における心理的自立 (Ⅲ) −青年の心理的自立に及ぼす家族機能の影響− 北海道教育大学紀要 (教育科学編) , 55、77−85.

高坂康雅・戸田弘二 (2006) . 青年期における心理的自立 (Ⅱ) −心理的自立尺度の作成− 北海道教育大学紀要 (教育科学編) , 56, 17-30.

小高恵 (1998) . 青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究 教育心理学研究, 46, 333-342.

久世敏雄・久世妙子 (1980) . 自立心を育てる 有斐閣

宮下一博・渡辺朝子 (1992) . 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部紀要, 40, 107-111.

Montemayor, R. (1983) . Parents and adolescent in conflict: All families some of the time and some families most of the time. *Journal of Early Adolescence*, 3, 83-103.

永江誠司 (2000) . 青年期の自立にかかわる諸問題 (6) 思春期やせ症とボディ・イメージおよび女性性 福岡教育大学紀要・第4 分冊・教職科編 49、239-246.

西平直喜 (1990) . 成人になること−成育史心理学から− 東京大学出版会

落合良行・佐藤有耕 (1996) . 親子関係の変化からみた心理的離乳 教育心理学研究, 44, 11 - 22.

高橋由利子 (2001) . 青年期のアイデンティティの発達と親子関係について 日本教育心理学会総会発表論文集, 43, 220.

辻大介 (2003) . 若者の友人・親子関係とコミュニケーションに関する調査研究 概要報告書−首都圏

在住の16～17歳を対象に－　関西大学社会学部紀要，34，373-389.

渡部真　(2005)，モラトリアム青年の今日的意味　渡部　真（編）現代のエスプリ　モラトリアム青年肯定論　－現代青年の新たな像を求めて－　至文堂　PP. 10-40

渡邊恵子　(1990)，自立の概念化の試み　日本女子大学紀要（人間社会学部），1，189-206.

White, K. M., Speisman, J. C., & Costos, D. (1983). Young adults and their parents. : Individuation to Mutuality. In Harold D. Grotevant, Catherine R. Cooper (Eds.), *Adolescent Development in the Family.* New Directions for Child Development, no.22. San Francisco : Jossey-Bass, PP. 61-76

山田昌弘　(1997)，友達親子が語られる背景　季刊　子ども学　Vol.4　ベネッセコーポレーション　PP. 16-21

山岸明子　(2000)，女子青年によって再構成された幼少期から現在にかけての母親との関係　青年心理学研究，12, 31-46.

山本彩留子・岡本祐子　(2008)，大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ，対人態度の関連性　広島大学心理学研究，8, 107-120.

Youniss, J., & Smollar, J. (1990). Self through relationship development. In H. Bosma, & S. Jackson (Eds.), *Coping and self-concept in adolescence.* Berlin Heidelberg: Springer – Verlag

（研究紀要編集部は、編集発行規程第５条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する。2009年９月24日付）。